

西域出土資料と仏教研究

上 山 大 峻

一、西域研究の発端

私の所属いたします龍谷大学は浄土真宗本願寺派（西本願寺）という宗派を設立母体とした大学でございます。ご承知のように西本願寺の第二二代目の門主大谷光瑞師（一八七六～一九四八）が、大谷探検隊（一九〇二～一四）という、とてもないことを実行いたしました。その時蒐集しました資料の一部が、光瑞師が亡くなられた後、本願寺の蔵の中から見つかり、それを龍谷大学に研究せよということに寄託されたものが龍谷大学の西域資料の中心をなすものでございます。これを基にして一九五三年に「西域文化研究会」が設立され、その成果が『西域文化研究』六卷（一九五八～六五）として出版されました。西域資料の実物がまとまってあるのは、日本では龍谷大学だけです。私どもは西域資料研究のいはば責任を負われているような形で、この研究を続けている次

第でございます。ながい間、井ノ口泰淳先生が西域研究の主任をつとめてこられ、西域研究の草分けの役をはたしてまいられました。が、定年退職されましたので、私にその役目がまわってきたようなわけでございます。

私は、もともと唯識であるとか仏教論理学であるとかの方に学問的関心をもっていたのですが、だんだんと敦煌文献の方に引きずり込まれたような形になってしましまして、いつの間にか敦煌の研究を専門とするものになってしまいました。敦煌写本の研究をやっておりますと、どうしても禅の資料との関係が出てまいります。本学の田中良昭先生ともそういうことで早くから学問的な交流をさせていただいておりました。この度、田中先生から来て話をするようにと声を掛けられました。が、そのような因縁でお断りするわけにまいりません。私でつとまるかどうか不安な思いで出てまいったようなことでございます。と申しますのも、私たちの研究は、写

本であるとか壁画であるとか、いわゆる考古学的な遺物に対する実証的研究でございます。ところが駒沢大学では、うかがうところ、やはり禅を中心とする教学的・思想的な研究が主であります。特に最近、非常に斬新な思想的研究を発表しておられる先生方が多い中で、私たちのような地面を掘り返したり或いは写本の皺を延ばしたりというような話が果たして皆さまの関心に合うものかどうか心配いたしましたからでございます。しかし、我田引水の評価になるかもしれません、現在、私は西域資料の研究ということも仏教の研究に重要な意味をもつものだと思っております。折角の機会ですので、そういう思いを持つにいたりました経緯を、西域資料とその研究のご報告をかねて申しあげてみたいと思う次第でございます。

二、西域資料の収集

今日お話したいことは、まず西域資料といわれるもの、どのようなものがあるかということ。それから、その資料を研究してどういうことが分かってくるか、そしてそれが仏教研究というものにどういう関連性を持つか、或いは意義があるかということ。そういうことを大体お話できればと思っております。欲張った内容ですが、時間が限られていることでございますので、大ざっぱなお話になるかと思えます。

その点お許しただきたいと思えます。

西域と申しますと、現在中国の甘肅省、新疆省の地域にあたり、タクラマカン砂漠を中にして、古くから天山北路・天山南路・西域南道という三つの主要な交通路、いわゆるシルクロードが通っていて、そこにいろいろなオアシス国家が興亡していたわけでございます。十三世紀ころより交易の通路が海路に移ったこともあり、オアシス都市もだんだん廃れていったわけですが、「さまよえる湖」で有名なロプノールの位置をめぐっての論争などを契機としまして、十九紀の終りころより、この地域が注目されるようになってきました。ヘディン、スタイン、ペリオ、ル・コック、グリウンウェーデルなどの率いる欧州の探検隊が次々この地域を探検し、その成果が報告されるとともに、遺跡から収集した文物がそれぞれの博物館におさめられました。ご承知のとおり大谷探検隊もその一でございます。一九〇二年から一四年まで三次にわたって行っておりますが、今年が一九九二年でございますのでちょうど九〇年という年を迎えることとなります。

西域資料とは、このような探検隊が遺跡などから蒐集した古文書や美術品などの考古資料を指します。調査された遺跡は殆ど仏教遺跡でして、寺院の跡の中に埋まっていたお経などを砂が付いたまま掘り出すというような形で採取されたようです。砂を除いたりしますとパラパラと小さい破片になっ

てしまう、そういう風な状態だったようです。資料採取の地域は、探検隊でそれぞれ異なりますが、大谷探検隊は主に、トルファン、ホータン、クチャあたりの遺跡から持ってきたものが多いようです。ドイツ探検隊もトルファンから採取したものが多くですね。スタインはホータン、ニヤ、トルファンなどの遺跡を発掘しておりますが、そういういろいろな探検隊が持って来た資料、これを一括して西域資料と言っております。古写本だけでなく、古い錦布であるとか、木片に書かれた文書であるとか、それから古い墓から掘り出した文書であるとか、仏塔・仏像の破片であるとか、そういうものもいろいろ含まれております。

西域資料を大きく分けますと、二つになります。一つは今言ったようなそういう遺跡の中から掘り出したものでございます。それらは砂をかぶっておりますので小さい破片になっておりますが、トルファン、クチャ辺りから主に集められてきたものです。それともう一つは、ご承知のとおり、敦煌莫高窟の第一七洞という洞窟の中から一九〇〇年に発見されたといわれます敦煌資料でございます。これは一まとめになつて洞窟の中から出てまいりました。これも西域資料ですが、一般に敦煌資料、あるいは敦煌出土資料と言っております。

三、資料の現状

敦煌出土資料につきましては、『講座敦煌』というシリーズの第一巻に梅村坦先生が「敦煌探検・研究史」を書かれ、一九八〇年までの敦煌資料の蒐集経緯、現状、あるいは研究史、そういうものを非常に詳しくまとめられておりますので、そちらに譲りたいと思ひますが、大筋だけを紹介しておきますと、オーレル・スタインの蒐集、それからポール・ペリオの蒐集、大谷探検隊の蒐集、その後のオルデンブルグの蒐集などがあります。それからご承知のとおり、各国の蒐集を知つて、中国政府が敦煌から引き上げましたものなどがござります。以下に蒐集と現状を列挙しておきましょう。

(一) 敦煌訪問の探検家と敦煌資料の蒐集と現状

- ◇ A・スタイン (Sir Aurel Stein 一八六一～一九四三) の蒐集
一九〇六～〇八年の第二次中央アジア探検のとき、および一九一三～一六年の第三次中央アジア探検のとき。
- ◇ P・ペリオ (Paul Pelliot 一八七八～一九四五) の蒐集
一九〇八年二月二五日、敦煌訪問 (同年五月三〇日に敦煌を離れる) のとき。

◇ 中国政府 (清朝) による敦煌写本の保全

- 一九一〇年、八六七九巻の写本を運びだし、京師図書館 (一九二九年、北京図書館に改名) に移した。

◇大谷探検隊（橋瑞超、吉川小一郎）の蒐集

一九一〇～一四年の第三次大谷探検隊の時、吉川は、橋瑞超と共に敦煌滞在中（一九二二年一月三〇日～同年二月四日）、王道士より多量（約八〇〇巻）の写経を購入。

◇オルデンブルグ (St. F. Oldenburg 一八六三～一九三四) の蒐集

一九〇九～一〇年、および一九一四～一五年の二回中央アジアを探検。後の探検のとき莫高窟を調査。蒐集資料は旧ソ連科学アカデミーレニングラード（現、サンクトペテルブルグ）支所に保管。

◇中華民国による残余の保全処置

清朝政府が敦煌写本を回収したあとも、残存があるという噂により、中華民国（一九一一年、民国に変わる）の甘肅省政府教育庁は敦煌知県に、問題のチベット字経巻を保全するように命令を下した。そこで、石室に残っていたチベット字仏典と、その三層寺院の南面する第二層の石室の中を調査して得たもの、合計九四包、四〇五斤を収納。

◇大谷探検隊将来資料の現状

所蔵Ⅱ龍谷大学、北京図書館、旅順博物館、京都博物館、天理図書館

（北京図書館の大谷探検隊蒐集敦煌写本は、旅順博物館所蔵の大谷探検隊資料より仏典写本のうちの六二一点〔内、漢文四二二、

チベット文二〇九）を移管したもの）

参考Ⅱ井ノ口泰淳「龍谷大学図書館蔵大谷探検隊将来敦煌古写経について」（『仏教学研究』三九・四〇）一九八四、「関東庁博物館・大谷家出品目録」（『新西域記』下巻・付録二）一九三七、『中国所蔵「大谷収集品」概況―特別に敦煌写経を中心―』尚林・方広鋈・栄新江共撰、西域研究会刊、一九九一。

◇各処所蔵の小コレクション

〔中国〕上海図書館、甘肅省博物館（蘭州）、甘肅省図書館（蘭州）、敦煌市博物館、敦煌研究院、北京大学ほか。

参考Ⅱ施萍婷「敦煌研究院、上海図書館及び天津芸術博物館所蔵の敦煌遺書をめぐって」（『東洋学報』七二・一・二）一九九〇。

〔台湾〕国立中央図書館所蔵

〔日本〕天理図書館、唐招提寺、大谷大学、京都博物館ほか。

右のうちの大谷探検隊将来資料につきまして、現在龍谷大学が持っておりますものはほんの一部でございます、殆どは中国にあります。はじめは旅順博物館の方に行っておりまして、それが第二次大戦後もそのまま残されたのです。実はこれは非常に大きなコレクションでございます、先日、旅順博物館の人にその内容を伺いましたところ、大谷探検隊の

持って帰ったものの殆どが（一部美術品は韓国の中央国立博物館）そこに保管されているようです。そしてその中に敦煌で入手した経巻が多数あり、六点だけを残して六二一点を一九五〇年代に北京図書館の方へ移したのです。現在は、そこで私たちでも閲覧することができるようになりました。しかし、旅順から北京に移されるまでの間に九点ほどが紛失しております。この中には『六祖壇経』の写本も入っております。残念なことでございます。天理図書館に『本際経』の敦煌写本がありますが、最近、これが明らかに大谷探検隊が旅順博物館に置いていたものだとということが表装の特徴などからはっきりいたしました。流出の事実が証拠づけられました。

それから、「小コレクション」というのは、中国の各地のいろいろなところに敦煌写経なるものが保管されていることをいいます。知るかぎりでは上海図書館、甘肅省博物館、甘肅省図書館、敦煌博物館、敦煌研究院、北京大学などです。

このことにつきましては施萍婷という敦煌研究院の方が、既に紹介しましたように論文を書いておられまして、詳しい情報を知ることができません。台湾のものは、台湾が中国本土から分離した時に持ってきたものでして、台湾の国立中央図書館に現在保管されています。一九七六年に『敦煌卷子』の名で全点が影印出版されました。それから日本でもいろいろなところに敦煌写経というものがございませう。天理図書館、唐

招提寺、大谷大学などです。京都博物館のものは、藤井有隣館が寄贈した古写経（故守屋孝蔵氏蒐集）に含まれるものと、松本文三郎氏旧蔵の大谷探検隊蒐集の古写経の一部です。唐招提寺、大谷大学の収蔵のもの、及び京都博物館の守屋蒐集品とは図版目録が出版されております。

（二）トルファン出土資料

ご参考までに、トルファン地域は、昔は高昌国という独立国でしたが、それが唐に併合されるなど、種々に推移しますが、私たちが対象とする時代の区分は、ほぼ次のようです。

① 高昌郡時代（三二七～四三九、前涼の張駿が高昌郡を設置し
てより北涼の滅亡まで）

② 沮渠氏高昌国時代（四四二～四六〇）

③ 麹氏高昌国時代（五〇一～六四〇）

④ 西州時代（六四〇～八世紀中頃）

⑤ 吐蕃支配時代（七九〇～九世紀中頃）

⑥ 西州回鶻時代（九世紀中頃～一三世紀）

トルファンからの資料採取は、各地の仏教遺跡からのものと、それから大谷探検隊とスタイン探検隊がそれを行ったようですが、アスターナの古墳群の古墓を発掘して採取したものがありません。吉川小一郎さんから聞いたことですが、敦煌でもどこでも、スタインやバトスらが殆ど掘り返して、もう採ってかえるものがない。大谷光瑞師からは「何か

持って帰れと言われるので、仕方なく墓を掘ったのだ」とおっしゃっていました。そのような次第で大胆にもアスターナの古墓をいくつか掘ったわけです。そしてミイラがありまして、そのミイラのまわりに紙製品があるのです。葬送儀礼のための道具でしょう。それらを捨てずに持って帰ったのです。ところが、それに使われていた紙は土地の官庁のいらなくなつた文書を払いさげてもらったもので、これが当時の社会経済の機構を知るための大変重要な資料として注目されることになつたのです。怪我の功名です。その他、死者の顔にかぶせてあつた錦とか、葬送の用具とかがありまして、そういう資料もトルファン資料には含まれます。

採取された文字資料には、いろいろな言語が見いだされました。列挙してみますと、漢語、イラン語(中世ペルシャ語、ソグド語、コータン語)、サンスクリット語、ウイグル語、西夏語、モンゴル語、チベット語、トカラ語(A・B)などです。また、使用されている文字から見ますと、漢字、ブラフミー文字、チベット文字、マニ文字、ソグド文字、ウイグル文字、西夏文字などを区別することができます。

トルファン地域には、いろいろな国の探検隊が繰り出して行きまして遺跡から資料を蒐集いたしました。そのことについては、最近、東洋文庫から『吐魯番・敦煌出土漢文文書研究文献目録』(一九九〇)というのが出まされて述べております

が、いま私の知識も加えて、概略を紹介しておきたいと思ひます。

◇大谷コレクションI(日本・龍谷大学図書館蔵)

内容Ⅱ①仏典類(漢文、梵文、胡文)、②俗文書類(漢文、胡文)、③美術品類(仏像、錦など)、④採取植物

(これらの資料には、木箱に入っていたものの外に、橋瑞超氏寄贈、吉川小一郎氏寄贈、後に購入したものを含む)

参考Ⅱ小田義久「龍谷大学図書館蔵大谷文書について」『大谷文書集成・巻』一九八四。

研究現状Ⅱ胡語資料は、百済康義教授を代表者とする「文部省国際学術研究」の研究事業として進めつつある。ドイツより招聘したW・ズンダーマン博士(中期イラン語)、P・ツイーメ博士(古代トルコ語)の客員研究員を加え、大谷探検隊将来の中世ペルシア語、パルチア語、ウイグル語、ソグド語などの写本の解説・整理を行っている。

チベット写本については、上山大峻・武内紹人により研究が完了し、「龍谷大学蔵チベット語文献の研究(三)―大谷探検隊蒐集チベット文書の研究(一)―」(『仏教文化研究所紀要』二六)一九八七、及び「龍谷大学蔵チベット語文献の研究(四)―大谷探検隊蒐集チベット文書の研究(二)―」(『同紀要』二八)一九九〇で報告。

西域で採取された植物資料については、北村四郎京都大学名誉教授により調査がおこなわれ、「大谷探検隊採集新疆省天山植物」(*Acta Phytotax. Geobot.* 40, 1989, pp. 103-106)に報告。

目録Ⅱ小笠原宣秀『西域出土古文書目録社会経済関係』二冊、一九五六〜五七。羽田明・山田信夫「大谷探検隊将来ウイグル語資料目録」(『西域文化研究』巻四)一九六一。

目録Ⅱ『西域考古図譜』下巻、一九一四。井ノ口泰淳編集・解説『西域出土仏典の研究』一九八一。小田義久編集・解説『大谷文書集所・巻』一九八四、『同・式』一九九〇。

◇大谷コレクションⅡ(中国・旅順博物館蔵)

内容Ⅱ(一九九二年三月一八日、王珍仁氏より聴取)大谷将来品は一六〇〇件・二六〇〇〇点。陶器、木製品、貨幣、密教絵画、絹織物、ミイラなど。中で多いものは写本と印刷、計一五〇〇片位。その大部分は漢文。非漢文は四〇〇片位。敦煌写経は六巻が残る(他は北京図書館に移管)。

目録(旅順博物館所蔵)Ⅱ『新西域記』下巻付録「関東庁博物館大谷家出品目録」一九三七。

目録Ⅱ『旅順博物館図録』、関東局編纂、座右宝刊行会、一九四三(再版一九五三)。「旅順博物館列品図録」一九三七。現況Ⅱ『中国所蔵「大谷収集品」概況―特別に敦煌写経を中心―』尚林、方広錫、榮新江共撰、西域研究会刊、一九

西域出土資料と仏教研究(上山)

九一参照。

◇大谷コレクションⅢ(東京国立博物館蔵)

内容Ⅱ東京博物館所蔵品は、美術資料を中心とする。目録Ⅱ『東京国立博物館図版目録・大谷探検隊将来品篇』、一九七一。

◇大谷コレクションⅣ(京都博物館蔵)

内容Ⅱ京都博物館のものは、同館の「松本コレクション」の中に入っているもので、現物が散逸したと考えられていた『西域考古図譜』の原資料に相当するものの一部(『妙法蓮華経』など五点)である。一九八四年に確認された。

◇大谷コレクションⅤ(国立民族学博物館蔵)

内容Ⅱ青木文教氏が一九一三年より三年間、チベットの仏教文化の調査に従事して蒐集。

目録・解説Ⅱ『国立民族学博物館研究報告別冊・青木文教師将来チベット民族資料目録』一九八三。

◇大谷コレクションⅥ(韓国・国立中央博物館蔵)

内容Ⅱ美術品が中心で、『新西域記』付録二の「朝鮮総督府博物館中央亜細亜発掘品目録」に載せる品目に相当。一部は整理され、現在、国立中央博物館の「中央アジア部」に展示さる。

目録Ⅱ『中央アジア美術』、国立中央博物館、一九八六。
※大谷コレクションについての情報資料

・ 目録『龍谷大学創立三五〇周年記念・大谷探検隊将来西域文化資料選』一九八三。

・ 藤枝晃「大谷コレクションの現状」(『龍谷大学創立三五〇周年記念・仏教東漸』一九八九)。

・ 京都新聞社主催「旅順博物館展」(京都市文化博物館・一九九二年二月二日～一九九三年一月二〇日)、出品約九〇点(内、大谷資料三〇点)、同図録『旅順博物館所蔵品展—幻の西域コレクション—』一九九二～九三。

◇ドイツコレクション(ドイツ)

収集=Preussische Turfan-Expeditionen I-W, 1901-14 (A. Grünwedel & A. von Le Coq)

所蔵=Zentralinstitut für Alte Geschichte und Archäologie, Akademie der Wissenschaften der DDR, Berlin. (現在 Turfan-Forschung, Berlin-Brandenburgische Akademie)

出版(研究・目録など)

(戦前)

Türkische Turfantexte 1-9.

Albert von Le Coq, *CHOTSHO*, Akademische Druck- u. Verlagsanstalt, 1913.

(戦後)

Beliner Turfantexte 1-15.

Katalog chinesischer buddhistischer Textfragmente, Bd. 1, 1975, Bd. 2, 1985.

Mary Boyce, *A Catalogue of the Iranian Manuscripts in the German Turfan Collection*, Berlin.

Manfred Taube, *Die Tibetica der Berliner Turfantextsammlung*, Berliner Turfantexte X, 1980.

※ドイツ統一により、旧東独アカデミーは解体、トルファン資料の研究は Turfanforschung により行われることとなる。

※『ドイツ・トゥルファン探検隊西域美術展』(東京国立博物館、一九九一年四月二日～五月二二日)。

◇出口コレクション(日本・四天王寺元管長・出口常順師蔵)
内容=一九三四年、出口常順氏がベルリンに『Rahmati』より譲受けたもの。

出版=藤枝晃『高昌残影』図版冊、法蔵館、一九七八(五―四点を収録)。

◇イスタンブールコレクション(トルコ・University of Istanbul)

出版=R. Rahmati Arat, *Among the Uighur Documents II*, Ural-Altaiischer Jahrbücher 36, 1964, pp. 262-272.

※山田信夫「イスタンブール大学図書館所蔵トルキスタン

出土文書類」(『西南アジア研究』二〇)一九六八。百濟康義「イスタンブール大学所蔵東トルキスタン出土文献―特にその出所について―」(『東方学』八四、一九九三)。

◇マンネルハイムコレクション (フィンランド・Finn-Ugrian Society)

内容=Baron C. G. Mannerheim (1867-1951) が蒐集したものの約二〇〇〇点。

出版=C. G. Mannerheim, *Across Asia from West to East in 1906-1908*, Suomalai-Ugrilainen Seura Kausatieteelligu Julkaisuya VIII, Helsinki, 1940.

Harry Halen, *Handbook of Oriental Collection in Finland*, Scandinavian Institute of Asian Studies Monograph Series 31, London/Malmö, 1978.

写真撮影=Kudara, Inokuchi & Fujieda in 1982.

◇スタインコレクション (イギリス・The British Library)

内容=スタインが第三次探検において収集したもの。出版=A. Stein, *Innermost Asia*, Oxford, 1928.

Henri Maspero, *Les documents chinois de la troisieme expedition de Sir Aurel Stein en Asie centrale*, Londres, 1953.

◇ロシアコレクション (ロシア・Institut Vostokovedeniya, St. Peterburg)

内容=Klements, Oldenburg, Krotokov などが蒐集。出版=Radloff, *Uigurische Sprachdenkmäler*, Leipzig, 1928.

◇中国

内容=中国科学院、新疆博物館等が発掘したもの。出版=黄文弼『吐魯番考古記』、北京、一九五四。

『新疆考古発掘報告 一九五五―一九五八』、北京、一九八三。

国家文物局古文獻研究室等編『吐魯番出土文書』全一〇冊 (一、二五冊既刊)。

私たちが残念におもっておりますのは、大谷探検隊の蒐集品が、各地に分散していることです。日本の龍谷大学にありますのは、ほんの一部です。私たちがしましては、何か肉親がバラバラになったようで、やるせない気持ちでございます。何とか一堂に会してやりたいし、全部を調査してみたいというのが切実な願いでございます。なかでも旅順博物館に所蔵されているものは、旅順が外国人の受け入れを拒んでます関係で、これまでどのようなものが、どのくらいあるか殆ど分かりませんでした。しかし、最近、交流の機会があり、大分実態が分かってきました。近い将来、それらを実見することができ、できれば共同研究できればと願っております。

す。北京図書館のものは近く写真出版されるようですし、だいぶ道が開けてまいりました。

中国では、一九五九年から七五年にかけて、中国科学院が中心になりました、一三回にわたり、カラコージャで四五六の墓を発掘して、その出土品約二七〇〇〇点が蒐集されております。今、これらを国家文物局古文獻研究室という編纂室をつくりまして、『吐魯番出土文書』全一〇巻の予定で、現在継続して出版中でございます。現在五冊まで出たと聞いておりますが、これは大谷探検隊が墓を掘りましたそのようなかたちでの蒐集です。

四、西域資料研究の意義

そういう西域資料を、どうやって研究し、いったい何がわかり、そしてどんな役に立つのかということでございますが、実は昭和三〇（一九五五）年に京都大学の人文科学研究所に敦煌写本の写真が入り、その研究のための研究会ができました、それに初めて参加しましたときは、私は大学院の学生でございました。芳村修基という先生に、仏典が多いらしいから「おまえ行って手伝え」ということで何も分らずに行ったのです。行きましたら、週一回の研究会ですが、くる日もくる日も写真を出してきて、お経の断片が『大正蔵経』の何ページの何行から何行目までに一致するかという、いわゆ

る同定作業を行うわけです。私も血気盛んな時でしたし、しかも唯識というような哲学的な研究に興味をもっていた時ですから、そういう同定作業などはいかにも馬鹿らしくて、仏教の学問のためには無駄のように思えて、「こんなことをして何の役にたつのかな」と、友人たちと愚痴を言い合ったものです。『法華経』だって『般若経』だって、ちゃんと立派な刊行本があるわけで、その上にあんな屑みたいものを調べてみたってしょうがないじゃあないかというのが正直な思いでした。皆も面白くなかったのでしょう、そういう作業が何年か続くうちに、ほとんどの人は脱落してしまいました。こうした出土資料の整理の研究というのは、どういう資料があるのかということと同定して目録を作るといのが第一に為されなければならない基礎作業です。それをやらされていたわけですが、その時の私には、これが仏教というもの、つまり仏になる教えとどんな関係があるのかが分かっていなかったのです。また、それに油を注ぐように、「おまえそんなことをやっていたらダメだぞ」、「そんなことは仏教学のやるべきことじゃあない」というようなアドバイスというかお叱りというか、そういうこともふん言われたことでした。先般、田中先生に、そういうことを私は言われたことがあると申しましたら、「私もそう言われたことがある」と田中先生も申され、私だけではなかったと大変意を強くした次第で

す。砂に埋もれたお経、その小さい断片を皺を伸ばしてみても、いったい何になるのか、しかし、その砂から出てきたものが、非常に重要なことを物語るといことがだんだん分かってまいりました。それでは、そういうことが仏教学研究の上でどのような意味があるのかについて、しばらく申させていだきたいと思えます。

一つに、そういう資料の中に、非常に古いかたちのお経が見つかるということです。大谷探検隊が蒐集したものの中に、元康二年（二九二）に竺法護が訳し、元康六年（二九六）に書写したことを明記する『諸仏要集経』の写本があり（『西域考古図譜』所載、実物は所在不明）、それを上限として四世紀頃からのものが出てまいります。中国では、版本にしてお経が伝承されてまいりました。宋版とか明版とかいろいろな版ができてまいります、その版本ができますとそれを残しまして、手書きのお経は全部捨て去られたと考えられるのです。おそらく版本の方が正確だと考えてのことでしょう。敦煌の洞窟に遺っていた手書きの古いお経は、そうした不用なお経を処分するために洞窟に入れて封鎖したのではないかと、いう説もごまいます。そういうことで中国には、古い手書きのものはほとんど無いわけです。ところが、無くなつたはずの古い時代のお経が敦煌の洞窟や砂の中に保存されていたのです。そこで、それらと現在のものとを比べてみます

と、その内容が違う場合があります。その時どちらが正しいかということとはともかくとしまして、それによってより原型に近い資料と現在の文献とを比較することができわけです。伝承の間にいろいろな訂正が行われたり書き加えが行われたり、あるいは誤写があったりした事実を知ることができるので。

それから「古逸」の文献が回収できることも重要です。中国本土であったはずだけでも無くなつていたというものを「古逸」と言っています、そういうものが敦煌写本の中に発見されるのです。代表的なものは三階教の文献でしょう。この宗教は中央で弾圧されて本がなくなつていたのが、その影響が及ばない敦煌で保管されていたわけです。それから、禅関係の写本です。実は日本の仏教学者で敦煌文献に最初に注目されたのは禅宗系統の学者でございました。なぜかと申しますと、失われていたはずの北宗系統の禅宗文献が敦煌資料の中からたくさん出てきて、その重要性をいはやく認識されたからです。特に『楞伽師資記』であるとか『伝法宝紀』であるとか、古い燈史をはじめとする北宗文献が出てきたのです。今まで散逸したと思われていた禅の文献が見つかったときは、どんなにか驚きであったことでしょう。鈴木大拙、久野芳隆、それから矢吹慶輝、宇井伯寿、中国の胡適、こういう方々がどんどん禅宗の資料の研究をなされてきまし

た。このことは、本学の田中良昭先生の「敦煌文献と禅宗資料―その整理状況と資料価値―」(『駒沢大学大学院仏教学研究年報』七、一九七三)、および「敦煌禅籍(漢文)研究概史」(『東京大学文学部・文化交流研究施設研究紀要』五、一九八一)に詳しく述べられておりますので、ご参照いただきたいと存じます。それらの新発見の資料が宇井伯寿先生の「北宗残簡」(『禅宗史研究』一九三五)、柳田聖山先生の『初期禅宗史書の研究』(一九六七)、田中良昭先生の『敦煌禅宗文献の研究』(一九八三)に集大成されましたこととはご承知のとおりでございます。

古逸といえますと、最近、龍谷大学の百済康義先生が『大無量寿経』の現存のどの本とも合わない『大無量寿経』の写本を、イスタンブールにあるトルファン出土の漢文資料から発見されました。(『漢訳無量寿経の新異訳断片』藤田宏達博士記念論集・インド哲学と仏教一九八九)。このお経は私たちの浄土真宗にとりましては非常に大切な經典です。古来より五存七欠と言いました前後十二回漢訳されているのですが、現存するのは五種だけで、他の七種は名前だけは知られています。が散逸しているわけです。それらがどんな訳であったか、もちろん判りません。ところが百済先生がこのイスタンブールの資料から発見されました『大無量寿経』は、内容は明らかに『大無量寿経』であります。少なくとも現存する五つの

どの訳とも合わないのです。あくまで推定ですけど、百済先生は、もしかしたら七欠の中のひとつではないであろうかと言われます。そういうように、中央アジアの方に中原で無くなったものが保管されているという可能性があるので。この例は、敦煌からだけでなく、トルファンの資料からも、古逸の資料を回収することができることを物語っています。大正大藏経の第八五巻には、敦煌資料からそうした古逸の仏典を集めて収録しておりますが、その後、発見されたものも相当数あり、かなりの追加が可能です。

それから、私たちが「未伝仏典」とよんでいるものがあります。漢文仏典でありながら、敦煌やトルファンなどの地方で訳されたり、作られたりしたもので、結局、中央に名前さえも伝えられないままになっていたものです。そのようなものがたくさん発見されています。

スタインが敦煌から蒐集したもののS七九七に「十誦比丘戒本」という写本がありまして、これは敦煌出土のなかで年代のはっきりしている一ばん古い写本といわれるものがございます。ところがこの奥書に書いてある「建初元年十二月五日」というこの本の書写の年は四〇六年に当たります。ところが、この本に似たような「十誦律」の本が鳩摩羅什の翻訳で『大正藏経』に入っております。そこでこの写本と比べてみますと、似ているようで違うのです。鳩摩羅什は三四四年

から四一三年ですから、ほぼ似た年代でございしますが、鳩摩羅什の訳とは違うものが敦煌あたりで行われていたということとです。なお、この写本の奥書から、当時、かなり整った教团组织が既に敦煌にあったということも分るのです。私たちはどうしても長安を中心として仏教文化というものを考えがちですが、敦煌はじめ河西の諸都市においても相当大きな整った仏教教団というものができていて、そこで独自に經典が訳されたり、講義が行われていた可能性は十分にあるわけです。私たちは漢文に訳されたり、漢文で書かれたりした仏教資料は、経録にきちっと名前が載せられていて、現物もあるという風に思いがちですが、どうも中央に届いて記録に残る仏教典籍は稀であって、多くは地方で行われながらも失われてしまっている可能性の方がつよいのです。玄奘や義浄などの訳したものは、きちっとした訳所で翻訳していただけますから、そのまま残るでしょうけれども、特に訳経の初期の時代や、戦乱などで中央との交流が途絶えた中央アジアの都市でできた仏典などは、中原に伝えられる場合の方がむしろ稀であると考えるべきでしょう。

たとえば、私が研究いたしました曇曠や法成の著作です。曇曠という僧侶は、長安の西明寺で学んでいたのですが、安祿山の乱（七五五）のころ、長安の仏教界の腐敗に嫌気がさして、故郷の建康に帰ろうとするのですが、折しもチベット

が河西地方を攻略していたときで、彼はだんだんと西の方へ追いやられ、最後にたどりついた敦煌で終りました。敦煌も最後にはチベットに占領される（七八六）わけですが、彼は敦煌に来て、著作を行い、また講義を行いました。彼は現在確認できるもので七種の著作を行っていますが、これらのことは、敦煌に保存されていた彼の著作の写本からはじめて分ったことです。これらの著作は、敦煌地方だけで行われて終わったものです。

曇曠より大分後になりますが、チベットに占領されていたころ（七八六～八四五）の敦煌の仏教界で生き活躍した法成という僧侶がいました。彼も全く中国の中央には知られていません。この人物は、チベット語と漢語の少なくとも両語に通じ、両方に跨って多くの著作を残しました。その当時、敦煌はチベット国だったから、チベット語に翻訳したものは一部チベット蔵経の方に残っていますが、漢文の著作の方は長安には全く伝えられませんでした。

次に、中央アジアのいろいろの民族がどのようにに仏典を受容し、仏教がどのようにに伝播していたかを西域資料は物語ります。最近、ウイグル語の『円覚経』の資料が、百済先生により発見されました（百済康義「ウイグル訳『円覚経』とその註釈」『龍谷紀要』一四、一九九二）。これは龍谷大学にある版本のウイグル語文献で、時代は十三世紀以降のものだそうで

す。それと同種のものがドイツにもありまして、それは『円覚経』の後書きの部分です。同じトルファン地域で蒐集された同じ版本のものが、両方に別れて保存されていたわけですね。両方合わせてみますと、明らかに『円覚経』であるということがはっきりしたというわけです。この資料は、ウイグル語を読む人たちが、『円覚経』を大事な本として版に起して流布させていたことを証明します。ところがこれと同時に『円覚経』の注釈も発見されました。その中に『円覚経』の本文が引用されていますので、そうだと判ったのですが、一体だれの注釈だろうかということ、百濟先生は宗密をはじめとしてあらゆる人の『円覚経』の注釈を調べてみられたのですが、結局、合うものが無い。どうもトルファン地方で新しく出来た『円覚経』の注釈書ではないかと言われます。中国以外の地域で注釈が為される可能性はもちろんあるわけです。ある時代、『円覚経』がトルファンの地域で流行し、ウイグル語族に読まれていたということです。ちなみに、『絶観論』の写本がトルファンから出土しております。また、『梁朝傳大士金剛經頌』もウイグル写本の中に非常にたくさん発見されています(井ノ口泰淳「金剛般若経傳承の一形式―梁朝傳大士頌金剛經―に関する敦煌・トルファン出土資料の若干について―」『国訳一切経印度撰述部月報・三蔵』二一、一九七〇、T. Inokuti: Uber das "Jin 'gang jing" mit den Gathas des Meister Fu der

Liang-dynastie nebst Vorwort, Berliner Turfan-Texte I, Berlin, 1971)。これらのことは、トルファン地域で、禪が行われていたこと、しかも独自に注釈を作るまでの研究がなされておき、そういう人物がおったということ物語るわけです。西夏文の『六祖壇経』の写本があることはご承知だと思いますが、こうしてみますと、禪は中央アジアの相当数の民族まで広がっていたと推定せざるをえません。禪は、どうやら従来予想しなかった地域にまで流行していたようです。私たちは禪といえばすぐに、中国で成立し、そこではやって、それが朝鮮半島、日本へというルートでしか考えないのですが、よく考えてみれば、日本に來たと同じように逆の方向にも伝わった可能性はあるわけです。他の民族にも当然すばらしい仏教であれば受け入れられていたでしょう。出土資料の研究は、そのことを気づかせてくれたのです。

おなじ問題なのですが、ご承知のとおりチベット訳の禪宗文献が敦煌資料の中からかなりの数発見されました。最初、私が『楞伽師資記』を紹介したときは、こんなことがあってよいのだろうかという感じで、おずおずと紹介したんですが、次から次へと出てまいりますので、まぎれもなく禪がチベット語地域へも伝わっていった事実を認めざるをえなくなったのです。禪はチベットの方へも受け入れられていて、今ニンマ派というチベット仏教の学派の中に溶け込んでいると

いうことも分かってきました。ただし、チベット人は、それが禅であるとは言いませんが。そういう事実も敦煌出土の資料から分かってきたわけです。

次に、出土資料によって、史実が検証できたり、歴史の裏にかくれていた新事実があきらかになったりすることがあります。私たちは、これまでほとんど中国の歴史書に書かれていることを頼りに東アジアの歴史を理解してきました。ですから、そこに書かれていないこと、また曲げて書かれていることは分らなかったのです。中央アジアで禅が行われていたということが全然知られていなかったように、実際は、歴史書に書かれていない事実が山ほどあるわけです。編纂された歴史書によるかぎり当然そういうことが起こり得るわけですが、その書かれていない事実、また潤色されていた事実が出土資料によって分かることがあるのです。特にチベットの関係では、かなり重大な問題をひき起しました。例の「チベット宗論」、すなわち「邏娑(ラサ)の宗論」あるいは「サムエ宗論」と言われている、中国僧摩訶衍禪師とインド僧カマラシーラとが、チソンデツェン王の御前で争ったという教義論争の漢文資料が敦煌資料の中から発見されたのがそれです。この事件は『プトンの仏教史』などのチベットの史書には書いてはあります。でも、どうも伝説くさくて史実とは認めにくかったのです。それが、ポール・ドミエヴィル先生

が敦煌資料の中から『頓悟大乘正理決』という論争の漢文の記録を発見されました。史実であることがはっきりしたわけですね。この資料は摩訶衍側にたつて、宗論の経緯や内容を記録したのですが、チベット側にもチベット語での記録がありました。おそらくサンスクリット側の記録もありました。『頓悟大乘正理決』を編纂する前の「長編」といわれる元の資料も見つかりました。そうした考古学的な資料が次々に発見されまして、今まで伝説であったと思っていたことが、生々しく史実として明らかにされてきました。以後、チベット仏教の研究、特に初期チベット仏教の研究は、同時代の敦煌資料を加えての実証的研究へと変わっていききました。

右の例は、従来、知られてはいたが、はっきりしなかった歴史の「検証」ができた場合ですが、まったく空白になっていたことが新たに明らかになることがあります。たとえば、チベットのティクデツェン王の時代に『大乘経纂要義』や『無量寿宗要経』という仏典が大量に写されているという事実が敦煌資料の調査より判明しました。特に『大乘経纂要義』の書写と流布は、初期チベット仏教にとって非常に重要なことであるにもかかわらず、なぜか伝世のチベット史書のどこにも書いてありません。

見えないことが見えてきて、従来の見解を変更するにいたる例としまして、次のようなことがあります。わが国の聖徳

太子は「三経義疏」を著作されたことで有名ですが、敦煌の北朝期の写本の中に、その一つの『勝鬘経義疏』と非常によく似たものが見つかったのです。文章を比べてみますと八割以上一致します。新聞が「聖徳太子の種本を発見」と見出しをつけて発表しましたので、大問題になってしまいました。が、従来、太子の書かれたもののお手本になる本が中国に見いだせなかったので、あたかも太子が無から独創で作られたように思われていたのです。太子の疏が敦煌まで伝わるということはありえませんが、どうしても、太子の方が敦煌の『勝鬘経義疏』を参照されたといわざるをえない。勿論、敦煌から直接に日本に届くということはありません。しかし、長安を中心に考えてみますと謎は簡単にとけます。長安でできた『勝鬘経』の注釈書が東西にわかれて伝播していたということ。太子のお手本はちゃんとあったのです。それが中国で失われていたにすぎないのです。実際はそのような本がたくさんあって、長安を中心として同心円的に伝わっていたのです。だから、敦煌にあるものと奈良にあるものとの内容が一致するという現象が起きたのです。分かってみれば、ごく当然のことです。敦煌資料が今まで気づかなかった歴史の盲点に眼を開かせてくれたのです。ちなみに、藤枝晃先生は、聖徳太子が書かれたという『勝鬘経義疏』は、本当に太子が書かれたものではなく、法隆寺にあたり保管され

ていたものを聖徳太子のものにして伝承したのだという興味ある説を提起しておられますが、今日は、そこまでは触れないことにいたします。

五、写本の形から歴史を読む

これまでご紹介しましたように、出土資料からいろいろなことが明らかになります。なかでも中原で失われたもの、あるいは伝わっていないものが見つかるということは大変魅力的なこと。しかし、その場合、その資料の存在の意味をあくまでも中央アジア独自の仏教の展開の中で理解しなければならぬということをつけ加えておきたいと思えます。とかく、私たちは中国中原の成立した観念に引き寄せて考えがちだからです。たとえばチベット宗論の記録である『頓悟大乘正理決』を、漢文で書かれた禅系統の書であるからといって、はたして中国の禅の教学系列で考えてよいかどうか。やはりそれが成立した地域の歴史的事情を考慮しながら、資料の位置や意味を判断すべきでしょう。

そういう意味からも、出土資料の研究においては、その基礎段階として、どうしても出土資料を産みだした中央アジアのそれぞれの地域の仏教の実状、あるいは独自性というものを復元していく必要があります。ところが、出土資料というものは、本来、ばらばらのもので叙述性がなく、しかも年代

も内容も不明な断片のものが殆どの状態です。そういう条件のなかで、どうやって歴史を再構築し全体像を明らかにするか、その方法が問題です。その為には、資料の一つ一つの性格や時代などを明確にして、その点と点を結びあわせながら、全体を描くという方法をとってゆかなければなりません。お経や論疏の写本には、何年に何のために写したかということが書かれた奥書が残っている場合もありますが、それは極めて稀で、殆どは何のお経か分からないような断片ばかりです。それでは、歴史を再現するための資料にはなりません。ところが、年代は書いてなくても、おおよそ筆跡などから、それが何年ころ、どういう事情で写されたものか分かるようになりました。私も旧東ドイツの科学アカデミーにありますが、コックらがトルファンから蒐集した経典断片の整理をしたことがあるのですが、五センチ四角ぐらいの小さいお経の断片の同定作業を続けておりますと、最初は苦労でしたが、だんだん慣れてきまして「あっ、これは『涅槃経』の断片だ」「これは『金剛般若』だ」というふうに、感触だけで大体判別できるようになってきました。つまりお経によってそれぞれ書体や用紙に特色があるわけです。そしてそれが同時に、その写本の年代を物語ったり、そのお経の性格を物語ったりしているわけです。つまり、年代は書いてありませんが、帰納的にある程度その筆跡とか使用されている紙である

とか、それから書き方の種類・形であるとかそういうもので資料の性格や年代が判定できるのです。こうなりますと、今まで奥書もなく年代が不明で歴史的資料として扱えなかったものが、資料として採用することができるようになって、編年が可能になってきます。たとえば、隷書風の筆跡で、用紙の上下の界線の幅が狭い、白っぽい紙のものは、北朝期あるいは北涼の時代のものであるということがすぐ判ってきます。そしてお経ならば『正法華』か『摩訶般若』ではないかと推定できるわけです。それが『妙法蓮華経』になりますと、きちっとした楷書で、黄色く染めた立派な紙に書かれています。すぐに判別できます。

ところが、『金剛般若経』や『大般若経』になりますと、これは毛筆で書いた字ではなく、木をけずって作ったペンのようなもので書いた筆跡です。七八六年に敦煌がチベットに占領されて以後は、毛筆が入手しにくくなったことと、チベット文字を書くのに便利な木筆が、漢字の書写にも用いられるようになったためです。そのような文字の特徴から、ほぼ写本の時代を判別することができますのです。

チベット時代に生きた法成の講義を筆録した『瑜伽論手記』あるいは『瑜伽論分門記』などは、木筆で書かれた典型的な例です。弟子の一人である法鏡の筆録したものには、行間にチベット字の書き入れが見られます。この人物はチベッ

ト語を解することができて、法成が説明したチベット語の対応語などを記入したのだろうと思います。こうした写本を見ていると、どういう風に講義が行われたかというような事情がよく分かります。

敦煌写本に多い禅関係の写本は、そのような特徴からみますと、ほとんど九世紀以降の写本で、それにあまりきつちりと写されたものはありません。例の『六祖壇経』の写本もそうです。恐らく漢字をあまり知らないものが書いたのではないかと思います。恐らく漢字をあまり知らないものが書いたのではないかと思います。これに比べて唯識の本などは、キチッと書かれたものが多いことから考えますと、当時の禅は、やはり庶民の間で流行っていたものではないであろうかと思われます。こういう風に見てゆくならば、中央アジア、あるいは敦煌で、どういう仏教が、何時ころ、どのよう展開したかということが徐々に明らかになっていきましよう。いずれにしても、写本に書かれた文章だけからでなく、あらゆる面から総合的に写本の物語ることを読みとり聞き取ってゆくことが重要な方法です。写本からだけでなく、壁画や仏窟の形態などから分かることも加えてゆくべきでしょう。そうして、根気よく一つ一つの点を明らかにし、それらを結んでゆくならば、西域地方に展開した仏教の独自の様相が立体的に姿をあらわしてくるに違いありません。

私たちのやっておりますことは、教学の哲学的な研究から

みますと、なんとも即物的で、どうも次元が低い感じがいたします。実際、そうおっしゃって、こんなことは仏教学の範疇に入るものではないと考えておられる方もおられるようでございます。申しあげておきますが、私はこういうことをやっておりますが、教学的な仏教学の重要性を決して否定するものではありません。仏教学は、もちろん教学研究が一番大事であることは言うまでもありません。そうではあります。が、こういうふうな生の形で人々が信仰していた跡と申しますか、そうした姿を明らかにしていくということも仏教研究の非常に大事な一面ではないであろうかというのを思うわけです。そして、そのような面が明らかになってゆくことが、教学的展開の意味をより明らかにさせることになるのではないかと思うわけでございます。

たくさんの方のことを短時間に申し上げようとしたために、お聞き苦しかったことと思いますが、これももちまして私の話を終わらせていただきたいと思っております。ご静聴いただきまして誠にありがとうございます。

（本稿は平成四年六月二十九日に行われた公開講演の記録をもとに、先生に加筆訂正していただいたものです）